ネパール・カトマンズ周辺の昆虫

加野　正

はじめに

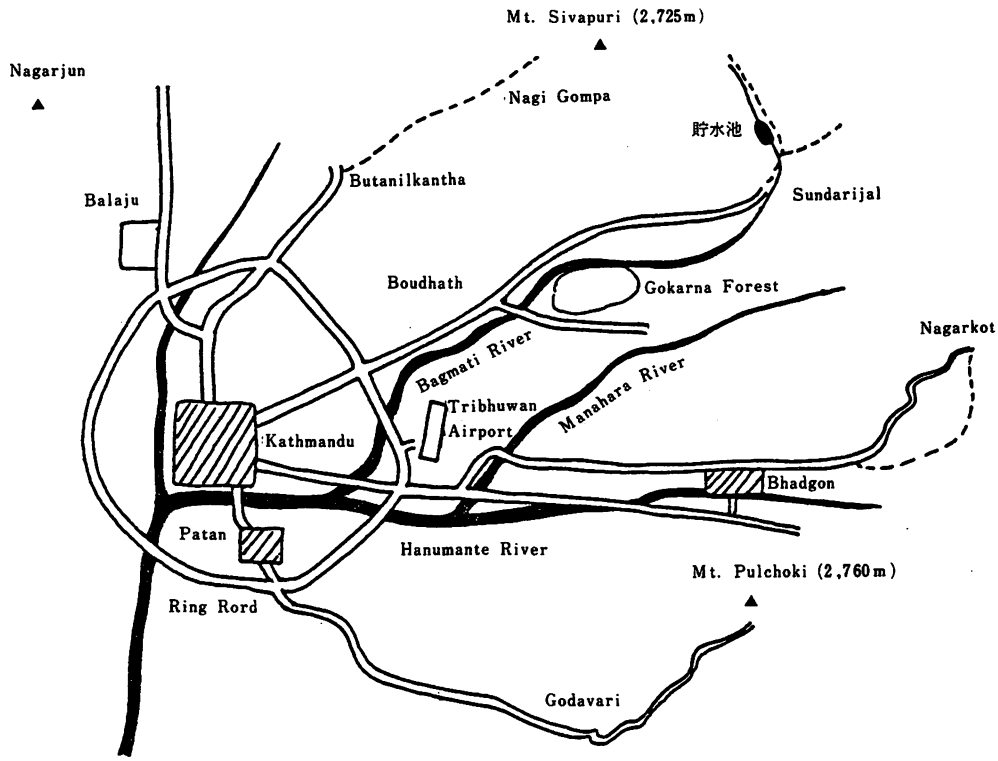
ネパールで虫を採集するという，15年来の夢をようやく実現することができた．1985年４月６～26日の３週間，カトマンズに滞在し，周辺で採集を試みた．採集できたのは，ほとんどが蝶と甲虫であったが，まだ整理・同定がすんでいないので，詳しい採集品のリストは後日報告することとしたい．そこで，ここではカトマンズ周辺での採集とその印象を中心に述べてみたい．

カトマンズは標高約 1,300m で，周囲をナガルコート（ Nagarkot ），プルチョキ（ Pulchoki ），シヴァプリ（ Shivapuri ），チャンドラギリ（ Chandragiri ），ナガルジュン（ Nagarjun ）など 2,000m から 2,700m を越える山（丘）々に囲まれ，Kathmandu Valley と呼ばれる．このあたりはいわゆる照葉樹林地帯である．カトマンズの４月は，季節的にはプレモンスーン期にあたり，天候には割とめぐまれたものの，非常に乾燥しており，気温も高く，採集していて，のどの乾きとほこりっぽさにはまいった．

カトマンズでの採集地はゴダヴァリ（ Godavari ），プルチョキ，ナガルジュン，ゴカルナの森（ Gokaruna Forest ），バドガオン（ Bhadogaon ），ナガルコート，ブタニールカンタ（ Butanilkantha ），スンダリジャル（ Sundarijal ）であった．

カトマンズへ

４月３日夕刻，小雨降る大阪空港を発ち，ホンコン経由にて深夜バンコクに到着．カトマンズへのチケット購入のためにバンコクにしばらく滞在した．４月６日バンコクを出発，昼にいよいよ待望のカトマンズ・トリヴァン空港に降り立つ．飛行機から見たカトマンズ周辺は乾いて赤茶けた感じで，とても虫がたくさんいるようには思えなかった．空港からバスで市街地へ向かい， Stone House Lodge なるところに部屋をとる．お世辞にも清潔とはいいがたく，狭い部屋で，寝袋を敷かなければとてもベッドに横たわる気はしないようなところであった．さっそく周辺をうろつくが，やはり乾燥して，ほこりっぽい街であった．



いろいろと用事があり，採集は4月9日より始めた．以下にカトマンズでの採集の様子を述べてみたい．

ゴダヴァリ：4月9日・16日

カトマンズの南東，プルチョキの登山口の村で，植物園もある．ラトナパークよりパタン経由でゴダヴァリまでバスがある．このバスは日本の援助で入ったとかで，ニーロー・バス（青バス）と呼ばれている．バスを降りるとすぐ草地があり，牛糞がころがっている．ここでダイコクコガネやいろいろな角をもつエンマコガネの仲間が得られた．牛糞に混じって人糞も道路沿いに点々ところがっているが，これらには糞虫が少ない．バス道をそのまま進むとプルチョキの山頂へ至る道，左に折れると植物園への道である．植物園の入園料は50パイサと安いが，虫はあまりいない．植物園の手前に村があり，村の入口に水場がある．ここにアゲハ類が吸水に来ている．通りがかりの人が吸水している蝶を指し，「ジャパニ！・・・・」と叫ぶので，しかたなくボロボロのアオスジアゲハ，タイワンタイマイなどをネットにおさめる．

村はプルチョキの山裾にあり，プルチョキに通じる道がある．村の周辺はやたらに道が多く，どれがどれやらさっぱり判らない．小枝を山のように背負ったお

ばさん達に道を聞くが，何を言ってもうなずくのであてにはならない．とにかく適当に道をたどり採集をする．木はカシ類が多く着生ランがかなりある．しかし，全体的に乾いた感じで下草も少ない．マキを採るせいか，林はかなりすいた感じがする．

この村の周辺は蝶のよい採集地で，種類，数とももっとも多く採集できた．とくにシジミタテハチョウ科，タテハチョウ科が多い．主な採集品をひろってみると，アゲハチョウ科ではタイワンタイマイ，オオクジャク，アオスジ，オオベニモンなど，シロチョウ科ではタイワンモンシロ，モンキ，フィールドモンキ，タカムクシロ，Delias，Gonepteryx など，タテハチョウ科はシロヘリスミナガシ，ウスイロハレギ，ツマグロヒョウモン，アカタテハ，ヒメキミスジ，キミスジ，タテハモドキ類，ヒマラヤコヒオドシなど，マダラチョウ科は少なく，ヒメコモンアサギ，ツマムラサキなど，シジミタテハ科ではシジミタテハ，トラフシジミタテハ，Abisara など，シジミチョウ科ではウラナミシジミ，Tajuria など，セセリチョウ科は Tagiades，Notocrypta などであった．甲虫は，糞虫を除くと少なく，テントウムシばかりが目につく．糞虫ではゴホンダイコクも得られた．ほかに２，３頭のコガネムシなどを採集したが，どうも昼間は甲虫が少ないらしい（夜間は採集していないのでなんともいえないが）．

ブルチョキ：４月11日，18日，23日

標高 2,760m で，カトマンズ周辺の山では最も高い．先ほどのゴダヴァリのバス停をまっすぐ進み，塀で囲まれた建物の中を左に折れると山道がある．ほかにも道はあるが，歩いて登るにはこの道が判りやすい．３～４時間で頂上にたどり着けるが，体がなれるまではかなりきつい．初めて登った時は息が切れ，のどが乾き，死にそうになりながら，あえぎあえぎ歩を進めた．休日に当たると地元の人も登っており，「一緒に行こう」と誘われる．しかし，とてもついていけないのダ．だいたいネパール人は，平地も山道も同じように歩くのではと思えるぐらい元気である．山頂でテングアゲハが採れると聞いていたので，「テング！テング！」ととなえながら登った．

ブルチョキの中腹あたりにはあまり虫はいないが，シジミタテハ類，ウラナミシジミ（これはやたらに多い），タイワンモンシロ，フィールドモンキ，ヒマラヤコヒオドシなどが見られる程度である．しかし，今回唯一のゼフを得ているし，

また Letha baladeva がササがある場所の所々にいて楽しい．この蝶はトラじま模様のヒカゲチョウで，ヒカゲのくせに割と日向を好んで飛んでいる美しいチョウである．

しかし，なんといっても，ブルチョキでの採集のメインは頂上付近であろう．頂上に近づくにつれてスペインヒョウモン，ヒマラヤコヒオドシ，ヒオドシチョウ，オオモンシロチョウなどが現れる．キアゲハを採集したときにはどういうわけか嬉しくなった．頂上ではテングアゲハは見られず，アサクラアゲハ（？）が高い木の梢に舞っているのを眺めるだけであった．ここには，オオクジャクアゲハが多く，Hestina nama，キイロマドタテハ，Neope などが得られた．

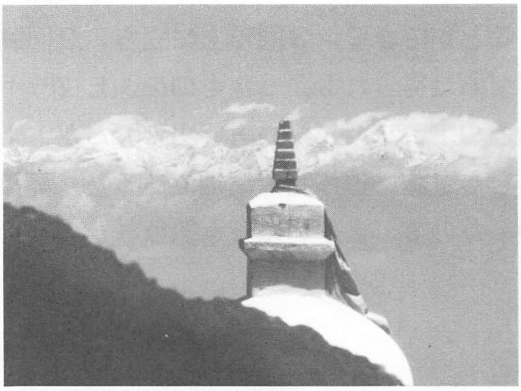
ブルチョキの頂上は岩山で，信仰の対象になっているらしく，真っ赤に塗られた石仏や白い仏塔がある．午前中かすんでいなければ，ここからヒマラヤの嶺々が一大パノラマとして空の上に見わたすことができる．３回頂上に立ち，２回眺めることができた．残念ながらテングアゲハは得られなかったものの，ヒマラヤの嶺々を背にネットを振る気分は格別のもので，忘れがたい思い出となった．ネパールへ来たんだなあという実感がひしひしと胸に迫った採集地であった．高標高地での Parnassius 採集が果たせなかったので，よけいにそう思われたのかもしれない．

ナガルジュン：４月13日，20日

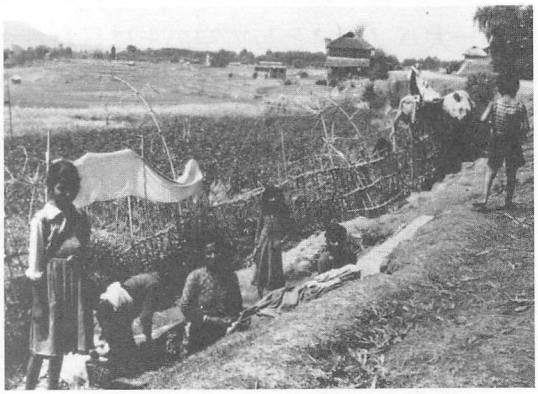
カトマンズの北西にある 2,000m ほどの丘で，ラニーポカリよりミニバスでバラジューまで行ける．バラジューには庭園があり，休日（土曜日）にはこのバスはかなり混む．どういうわけかネパール人はバスに乗ると異常なほど座りたがる．つめられるだけつめて座るので，気の弱い私などおしり半分のせているだけである．立っているほうが楽だが，立つこともできないくらい混んでいる．ついでながらもうひとつ，カトマンズでバスの発車を待つあいだ，かならずといってよいくらい子供が乗りこんできて，小銭をせびる．私とて，ネパールでは外人なので，当然のようにせびられる．かなりしつこくて，やらないとにらみつけられる．ネパール人の中には何やらわめいて追い立てる人もいるが，気弱な私にはとてもまねることはできない．

余談はさておき，この庭園を過ぎ土塀に沿って行くと，ナガルジュンへの入口がある．ここには女王の館があり，25パイサの入場料をとられる．ここには２度

訪れたが，結局山頂にはたどり着けなかった．１度目はネパールの正月（４月13日，ネパール暦2042年？）とかで，たくさんの人々が山を下りてくるのに出会った．とくに若い女性が多く，「ジャパニ？ From Tokyo ？」など声をかけてくる．途中で，バードウオッチングをしているネパールの若者と一緒になる．片言の英語で話すのでどこまで通じたのかよく判らないが（ただし彼は英語を話せる），とにかく虫が少ないのと，彼がしきりに一緒に下りようと誘うので，結局登るのは断念した．２度目はどういうわけか，中腹にグルカン兵と数人の少年がおり，ここから先は入れないという（たぶんそう言っているのであろう）．英語で理由を尋ねるが，みんな話せないらしく，ただ首をふりニタニタしているだけ．しかたなく引き返した．



プルチョキ山頂からのヒマラヤの眺め



Badgaon-Nagarkot間の水場の人たち

タカムクシロチョウ（Butanilkantha）

Neptis sp.（Butanilkantha）

前置きが長くなったが，そんなわけで，ここでは中腹以下での採集ということになった．ここの特徴としてはジャノメチョウ科と Athyma，Neptis などのタテハチョウ科が比較的多いことであろうか．そのほかモンキアゲハ，レテノールアゲハ，シジミタテハ類，アオタテハモドキ，ヒマラヤコヒオドシ，ヤマトシジミ，フィールドモンキ，タイワンモンシロなどである．とくにジャノメチョウ科では Melanitis，Lethe，Ypthima，Mycalesis，ジャノメチョウの一種などが得られ，カトマンズ周辺ではここに最も多くの種類がいた．

バドガオン～ナガルコート：4月10日

カトマンズの東にある古都バドガオンまでトロリーバスで行ける．バドガオンからナガルコート間はバスもあるが歩いてみることにした．残念ながら時間がなくナガルコートまでは行けなかったが，台地状の平坦部は大きな起伏のある見わたす限りの麦畑であり，のんびりとしてなかなかの風景である．山のふもとの谷も美しいところである．しかしながら虫はいまひとつで，めぼしいものは見られなかった．

学校帰りの子供達と片言の英語で話しながらぶらぶら歩く．道路沿いや麦畑にモンキチョウ，フィールドモンキ，タイワンモンシロ，チョウセンシロなどがちらちら飛んでいる．これらのチョウをネットにおさめながら進むが，そのうち子供達が私の下手くそなのを見かねてか，ネットをとり上げ採集してくれる．彼らの住む村で別れを告げ，さらに先へ行くと道は谷へ入っていく．ここらあたりにはアオタテハモドキ，ルリボシタテハモドキが河原に飛びかっているが，なかなか採りづらい．その先は急な登りとなり，松林となるせいか虫は少なく，引き返す．この道はのんびりした農村風景を楽しむのにはよい所であるが，虫の採集には向かない．とはいうものの，チョウセンシロチョウが採集できたのは今回ここだけであった．

ブタニールカンタ：4月14日

カトマンズの北にある村でシヴァプリのふもとにあたる．村の子供の話では，シヴァプリへの道は判りにくく，また時間もかかるとのことである．とりあえず途中のナギゴンパまで歩くことにする．ナギゴンパより上の方が緑も濃く面白そうであるが，道がはっきりせず引き返した．

このブタニールカンタの村の付近では山の中腹まで段々畑があり，虫は少ない．村の途中を右に折れ，麦畑の中の細道を小さな流れに沿って行く．道が上りにさしかかるあたりは土が深くけずられており，少し木もある．ここらあたりにやたらとタカムクシロチョウが飛びかっている．この蝶を一度にこんなにたくさん見るのは，今回の採集行でも初めてである．帰りに採集しようと先へ進む．ここからゴンパまではかなり急な登りで，疲れるうえ，虫はほとんどいない．ゴンパに行くという家族連れと一緒になるが，とてもついて行けない．ようやくのことでゴンパにたどり着く．道の所々に人糞がころがっている．やはり人糞には手が出ない．ここよりブタニールカンタの村の眺めはなかなかよい．段々畑の下にひろがる村々は牧歌的で，気分を落ち着かせてくれる．ゴンパの上にはラマ教特有の旗がひらめいている．風に打たれ，なんとも無気味な物悲しい音で鳴る．ここらあたりには Neptis やウラナミシジミなどが少し見れる程度で，やはり虫は少ない．ここより先は道が判りづらく，引き返すことにする．先ほどのタカムクシロのたくさんいたあたりに戻ったが，どういうわけかタカムクシロの姿はない．しかたなく，小川のそばにころがっている牛糞をあさる．エンマコガネ類が少々と，小ぶりのタマオシコガネを１頭得る．牛糞の下の孔道を掘っていて，ふと横の木を見るとタカムクシロが止まっている．うす暗いので気づかなかったが，よく見ると点々といる．100 頭ぐらいはいたであろうか．「そうか，タカムクシロは昼寝するんだ」などと独り言をつぶやきながら写真を撮る．みやげにでもと指で採集する．たいした成果はなかったが，このタカムクシロの昼寝はなかなかよい光景であった．

スンダリジャル：４月21日

カトマンズの北東にあるバグマティ川の上流域にあり，水と緑に囲まれた美しいところである．ここへ行くバスを捜すのには少々苦労した．ここはゴサイクンドへのトレッキングの出発点である． 1979 年に大阪自然史博物館の関係者の面々が，ここよりシヴァプリ山塊へトレッキングされ，ヒマラヤムカシトンボの幼虫と成虫を同時に採集されている．私は途中までしか行かなかったので，ヒマラヤムカシトンボに対面できなかった．しかし，カトマンズ周辺ではめずらしく水量の豊富な渓谷で，緑も濃く美しい．なんとなく日本の山と似た感じがする．ヒマラヤムカシトンボがいても不思議ではないように思われた．この渓谷の上部に

は耕作地があり，そこから村があるのが見わたせた．

スンダリジャルより急な道を登りきると，トレッキングのチェックポストがある．ここを左に折れると貯水池があり，ここより渓流沿いに進む．河原が所々にあり，牛糞がころがっている．エンマコガネ類を得たものの，大型の糞虫はいない．石を起こすとコオロギ，コメツキダマシ，ゴミムシ，ヤマビルなどがいる．雨季にはヤマビルが活躍しそうなところである．カトマンズは晴れていたが，シヴァプリあたりは雲が多く，ときおり日が射す程度である．川におりてみるとなにやらものすごいスピードで飛ぶものがある．フタオチョウである．ときおり止まるものの，なかなかネットをふるチャンスがない．たまに日が射したときだけ飛ぶのでチャンスは少ない．トラップをしかければ採れそうであるが，その用意をしていないのでしかたがない．ようやく悪戦苦闘のすえ１頭を得ることができた．そのほかアゲハ類やシジミタテハが少々見られた程度で，思ったより虫は少なかった．ただトンボの採集にはよさそうである．採集の下手な私にはトンボはなかなか採れなかったが．

ゴカルナの森：４月22日

カトマンズの北東，スンダリジャルへ行く途中にあり，付近には有名な世界最大の仏塔ボダナートもある．この森はサファリパークになっており，入場料５ルピーと破格の高値である．したがって，外国人観光客やネパールの金持ちのための公園というところである．入場の際に虫を採集してもよいかと聞くと，ダメだと言う．しかし，もう一度聞くとあいまいな答えなので，ダメでも採集してよいのだと判断して入る．ここには種々の動物が放し飼いにされており，糞虫が期待できそうである．とくにゾウの糞．サルやカモシカを横目にゾウの糞を求めてサファリコースを行く．ゾウの糞はわらのかたまりのようなもので，糞虫はほとんどいない．ゾウの糞につく糞虫はここまで来るといないようである．糞虫はどちらかといえばカモシカ類の糞の方がよさそうである．

ここの森はカシ類の大木が多く，虫の姿は少ない．しばらくぶらぶらしていると，オッサンが手招きをする．行ってみるとトラが穴の中に寝ており，これを見せたかったらしい．さすがに入口には柵がしてあった．さらに先に進むと，白いバラ科の花が見える．ネパールに来て，甲虫が集まりそうな花にはなかなかお目にかかれない．さっそくネットでゆすると，ハナムグリ，コガネムシなど甲虫類

が少し落ちてくる．ふと目の前の枝に視線をやると，カミキリムシが止まっている．今回唯一のカミキリムシである．その後，糞虫などを少々採集したが，蝶などはたいしたものもいない．結局カミキリムシを得たことをなぐさめとして帰路につく．５ルピー出して行くほどのところでもない．

おわりに

以上カトマンズでの採集について記した．当初の予定では，もっと長期間にわたるはずで，トレッキングなども予定していたが，タイでトラブルに見まわれ，やむなく１ケ月たらずになってしまった．カトマンズでもそのトラブルの処理のため，思うように採集できなかった．あこがれの Parnassius はまた夢のままになってしまった．せめて，カトマンズ周辺で採集できたのが不幸中の幸いというところである．

カトマンズ周辺は西南日本と同じ照葉樹林帯とはいえ，実際採集してみると，そこに住む虫の印象はかなり異なっている．確かに日本でもなじみ深いキアゲハ，モンキアゲハ，アカタテハ，ヒメアカタテハ，ルリタテハ，ヒオドシチョウ，ウラナミシジミなどもおり，また糞虫でもゴホンダイコクやダイコクのようなものは日本のそれに近い．どちらかと言えば，日本というより台湾で採集しているような感じである．しかし，やはりネパールであり，フィールドモンキ，ヒマラヤコヒオドシ，キイロマドタテハ，オオクジャクアゲハ，チョウセンシロチョウ，シロヘリスミナガシなど，この地を想わせる種も多い．また，シジミタテハ科のものは多いが，マダラチョウ科は意外と少ない．カトマンズで採集してみると，日本では何となく持っていた南方系とか北方系とかというイメージがくずれる思いであった．同じ照葉樹林帯とはいえ，日本の四季のはっきりしたところと，カトマンズの乾季，雨季で季節が分かれるところではかなり気候的に異なる．また，大陸と島という違いも大きいと思う．日本をとり囲む海と冬の寒さというものは，かなり生物の分布の障壁となるのであろう．

しかし，いろいろあったが，プルチョキ山頂でのヒマラヤの嶺々を背に採集した気分は忘れがたいものである．最後に，今回の旅行に協力していただいた方々に感謝の気持ちでいっぱいである．ネパールへの再訪の機会のあることを願いつつ筆を置きたい．